

はじめに

釈尊入滅後、弟子たちは釈尊の教え（法）、律の整備を進め、その過程において、仏教教団としての体制を確立していった。入滅から 100 年が過ぎると、律の条文の解釈とその実行に関して、或は、新たな条文の追加制定などを巡って、教団上層部と一般の大衆との間での対立が見え始め、紀元前 280 年頃、遂に第二結集において保守派の上座部と進歩派の大衆部に分裂した。これを「根本分裂」という。

その後、大衆部内において更なる分裂が起こり、続いて上座部も分裂した。これを「枝末分裂」と呼び、その結果、幾つかの部派を形成し、「部派仏教の時代」へと移行した。

紀元前 1 世紀頃になると、部派仏教とは別に新たに「大乘仏教」が興り、これ以降、仏教は部派仏教（小乗仏教）と大乘仏教の二つ流れを形成し、発展していくこととなる。

本稿では、大乘仏教興起の理由を、初期仏教における思想と実践論の比較のもと考察する。

大乘仏教興起の要因

根本分裂以降、北インドでは有部や法蔵部や化地部や大衆部説出世部等、西インドでは犢子部や正量部等、南インドでは制多山部などの大衆部諸派等が優勢となった。そして、各部派は、独自の律蔵や教理解釈（アビダルマ）を確立していった。

本来、仏教は、縁起を知り、四諦・八正道を実践することにより誰でも釈尊と同じ悟りに到達した「ブッダ」になれることを根本の教えとしてきた。しかし、部派仏教の時代になると釈尊は神聖化され、ブッダは、釈尊、過去の六仏（毘婆尸仏、尸棄仏、毘舍浮仏、拘留孫仏、拘那含牟尼仏、迦葉仏）、そして、未来の弥勒仏のみに限定されるようになった。一方、仏教教理の研鑽が進むにつれ、教理そのものが深化し難解なものになり、一般の民衆には理解し難いものになっていった。

この頃、インド北西部一帯では、外来諸民族の相次ぐ侵略が起こり、この侵略による被害や苦難から逃れたいという願いが民衆に芽生えた。これに呼応して、インドの土着信仰のヒンドゥー教への宗教形成がみられ、民衆と密着した信仰として徐々に広まっていった。このことは、仏教徒へも万人の救済という点で少なからず影響を及ぼしたと考えることができる。

このように大乘仏教の興起には、

- (1) 悟りへの解釈の変化
- (2) 救いという信仰心の芽生え
- (3) 他国の侵略
- (4) ヒンドゥー教等の他宗教の新興

等、仏教の内外にその要因を見出すことができる。

大乘仏教の思想

仏教に起こった新しい流れの主役は、説教者（法師）たちをリーダーとして仏塔を中心に集まった在家信者の集団であった。この集団は、釈尊を信仰の中心に据え、釈尊と同じ悟り（阿耨多羅三藐三菩提）へ到達でき

るという考えのもと、利他行である六波羅蜜の実践につとめた。この釈尊と同じ悟りに到達できるという考えは、本来の仏教への回帰ともいえる。

信者は自らを菩薩（菩提薩埵）と呼び、利他の誓願を起し、六波羅蜜の行を実践する者はだれでも菩薩であるとした。そして、菩薩は自身の悟りより衆生の救済を優先されなければならないという「衆生救済」の考えが生まれた。

そして、次第に釈尊自身が信仰の対象となるにつれ、無神論的色彩の濃かった仏教がヒンドゥー教的な有神論的仏教へと変貌していったのである。これにより、新たな釈尊像が確立され、「釈尊は超越的存在としての法身である」という概念が生まれ、人間としての釈尊は、超越的存在である法身の化現と見なされるに至った。更に、法身という概念は拡大解釈され、一仏世界から三世十方に仏が存在するという時間的にも空間的にも拡張された仏国土という世界観を確立させたのである。

このように法身と衆生救済という概念の導入が、仏教に新たな思想を芽生えさせ、大乘仏教を成立させたのである。

また、実践方法において、大乘仏教は六波羅蜜という利他行を中心に据えた。部派仏教においても四諦、八正道の実践から慈悲喜捨の四無量心への到達、布施・愛語・利行・同時の四摂法の実践という利他行の教えはあったが、修行者は自ら解脱し阿羅漢となることを志向する傾向が強く、大乘仏教とは利他行の位置づけを異にした。

六波羅蜜とは、仏が菩薩であった時に積んだ、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、般若（智慧）の六つの徳目の完成である。

布施は、在家は財施、出家者は法施である。持戒は戒律を守ること、忍辱は苦難を耐え忍ぶこと、精進はたゆまず仏道を実践すること、禪定は瞑想により精神を統一させることである。また、般若は真理を見極め、悟りを完成させることで、最も重要な目標である。

六波羅蜜の内、持戒、禪定、般若は、初期仏教における戒、定、慧の三学に相当し、仏教に引き継がれてきた実践徳目である。精進は個人の姿勢に関する徳目である。また、布施、忍辱は対社会的な徳目であり、大乘仏教の掲げる衆生救済思想の根幹をなす実践徳目である。

このように、大乘仏教は、部派仏教とは異なる思想と実践を掲げ、勢力を拡大していくこととなる。

おわりに

大乘仏教の教えは、成立当初より仏説を標榜した。そして、数々の教えを「経典」にまとめることに積極的に取り組んだ。現代でいえば情報化推進や情報公開ともいえる。この経典作成は大乘仏教の特色のひとつであるといえよう。更に、大乘仏教の起源を考えた場合、この経典の果す役割は大きい。

しかし、この経典作成が、大乘仏教に対する批判を増幅させ、大乘非仏説論を引き起こすこととなる。大乘非仏説論とは、大乘仏教の教えは仏説ではないとする批判である。史実としては、仏説ではないとすることが正しい。しかし、真の仏説か否かを問うこの非仏説議論は、既に『阿含経』にも見られ、また、時代は下るが、大乘仏教から発達した密教に対しても同様な批判があったことを考えると、仏教が抱える本質的な問題といえる。いつの世においても、教えを解釈するということには、新たな教えを萌芽させる可能性を生む。この批判を乗り越えた教えが真の教えになるのである。

大乘仏教の起源については、これまでに大衆部起源説、譬喩文学起源説、大乘仏教在家仏教起源説、大乘仏教周辺地起源説など様々な学説が発表されてきたが、確たる説がないのが現状である。私見ではあるが、近年のインターネットという新たな情報の流れの隆盛に見る人間の行動の中に幾つかのヒントがあるように思われる。時代の要求という民衆の潜在的な要求が顕在化し、特定の地域・組織においてではなく、しかも同時発生するという情報化急進が辿った流れが、大乘仏教の起源となったと考えることはできないであろうか。様々な経典という「情報」が民衆の選別を容易にすることにより、経典自体も切磋琢磨し内容を充実させ、大乘仏教の思想を確立していったのではないであろうか。これは、ショペン等の唱える説に類似するが、「情報化という流れ」は十分に大乘仏教興起を促し得たと考える。